



茅ヶ崎市教育センター
Chigasaki Educational Center

子どもたちのために
ともに教育環境を考える
教育センターの教育情報誌

学びあう響きあう

第14号
平成30年3月26日発行

編集担当／茅ヶ崎市教育センター
住所：茅ヶ崎市十間坂三丁目5番37号
☎ 研究研修担当（市青少年会館3階）
☎ 0467-86-9965
☎ 青少年教育相談担当（同館2階）
☎ 0467-86-9963
URL: <http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kyouiku/1005049/index.html>

教

育センターでは、「教育研究」「教育研修」「教育相談」の推進をしています。「教育研究」では、小・中学校の教育に関する様々な研究、幼児期の教育に関する基礎研究を行っています。「教育研修」では、研究成果を土台にした教職員の専門的な研修や市民の方々への家庭教育・幼児期の教育に関する講座などの機会を通して情報提供を行っています。また、長い歴史をもつ小学校中学校創意工夫・研究作品展も本教育センターが担当し、子どもたちの創意・研究心の育成に向けた取組を行っています。「教育相談」では、児童・生徒の様々な悩みに応え、自律性をはぐくむ支援ができるよう努めています。

【Contents】



- 幼児期の教育についての研究から見てきたこと（P.1）
- 茅ヶ崎市小学校中学校創意工夫・研究作品展のお知らせ（P.6）
- 一人で悩まないで相談しようー青少年教育相談室から（P.8）



幼児期の教育についての研究から見てきたこと～8年目のあゆみ

子どもの育ちを支える大人ができることは・・・

子どもがみせる日々の姿から、
子どもの成長を実感することも多いのではないのでしょうか。
見守る大人が、子どもの“今”にしっかり向き合い、寄り添っていくことの大切さを感じます。
子どもの育ちを支える大人ができることをみんなで考えていきたい・・・。
第14号ではそんな思いを強くする講演内容をご紹介します。

□「乳幼児期のコミュニケーションが創る子どもの力」より抜粋

立正大学准教授 岡本依子氏 乳幼児期の子育ち・子育て出前講座、平成29年10月21日（土）

□「子どもが傍らにいることの素晴らしさ・大変さー乳幼児期に必要な『経験』って何だろう？」より抜粋
関東学院大学准教授 三谷大紀氏 第14回乳幼児期の子育ち・子育て講座、平成29年11月9日（木）

乳幼児期のコミュニケーションが創る子どもの力

平成29年度開催
「乳幼児期の子育ち・子育て出前講座」より抜粋
（講師 岡本依子氏 H29.10.21 開催）



ヒトは子育てを前提に進化

生まれたての赤ちゃんは、未熟な状態で生まれます。ほ乳類ですからおなかの中でもっと成熟して生まれてきてほしいのに、人間の赤ちゃんは、そうではありません。

人間の赤ちゃんは、自分で十分な体温調節もできない、自分でご飯も食べることもできません。ですから、赤ちゃんが生まれた後、大人が世話をすることで成長を続けることができるのです。

「ヒトという種に生まれてきた以上、生物体として子育てをしなくては行けない」と考えた方がよいのかもしれません。

未熟でお世話が必要な赤ちゃん

赤ちゃんは、感覚機能が非常に優れた状態で生まれてきます。目は生まれた時から見えています。ピント調節や目をきよろきよろ動かすことはまだできないのですが、抱っこされると、赤ちゃんにとってちょうどよい距離で大人の顔が見えます。赤ちゃんは、ぼやっとした世界に「あっ、見えるものがきた」「これは何だろう」と、じ〜っと見つめます。見つめられた大人は、「あっ、目が合った」と感じ、赤ちゃんに恋をしていきます・・・。赤ちゃんは、人

の顔が好きというか、二つの点(目)を長く見つめるという性質があります。赤ちゃんは、目を動かすのが上手ではありませんので、目が合った後、じ〜っと見つめます。お母さんは、「私を見つめている・・・」と思うのです。

また、赤ちゃんは耳がよく聞こえます。赤ちゃんは人の声が好きです。何語でもよいのです。抑揚がある人の声が大好きですので、その抑揚に合わせて体をじたばたさせるという性質をもっています。大人が話しかけると、その抑揚の隙間で赤ちゃんはじたばた動くのです。どこか不器用そうな動きで一生懸命動いてくれる。動いてもらえると、「あっ、私に返事した」というふうになるので、もうちょっと話しかけようと思います。「話しかけるとまた動いた。もう一言話しかけよう。」またじたばた動いた。これが一番初めの赤ちゃんとのコミュニケーションです。

このように、赤ちゃんはできることもあります。「人の顔が好き」、「人の声が好き」。これらは生まれながらにもっているものです。なぜかはわかりませんが、赤ちゃんの注意は最初から人に向くようになっていきます。これを「ヒト指向性」といいます。赤ちゃんは、「放置されたら明日はないな…」と、多分感じているのでしょう。だから、二つの点が視野に入ってきたらまずは見つめる。見つめることで親を、「私はあなたを守るよ」という気分にさせて、世話をさせる。さらに、声が聞こえてきたらじたばたする。ちょっと大変でも、親を「この子のために頑張りたいわ」という気にさせる。赤ちゃんは、「お世話をさせる力」を備えて外の世界にやってきます。そのため、歩行や言葉はあとから発達します。また、生まれてみるまで何語を覚えるのか決まっています。生まれた後、たくさん聞いてから言葉を獲得しま

すので、赤ちゃんは何語でも話すことができるようになります。

赤ちゃんはやりとりができるか？

赤ちゃんなりにできることがあって、大人のいい意味での思い込みを使ってやりとりが成り立ちます。ここでいう思い込みは、赤ちゃんに向かう気持ち、赤ちゃんを見つめること、やりとりをしたいなという気持ちに支えられています。

それでは、言葉はどのように準備されていくのかを挙げてみます。

□相互同期性

人の声が好きで反応します。

□新生児模倣

赤ちゃんは模倣をします。ただ、8か月以上の明確な模倣とは違います。赤ちゃんの覚醒状態が良いときに、赤ちゃんの首を支えて2〜30cm離して、赤ちゃんが目が合ったなというところでゆっくり口を開閉すると、赤ちゃんは、じ〜っと見つめてぎこちなく視線が大人の口元に動きます。そして、赤ちゃんの口に力が入って動きます。模倣します。これを新生児模倣といいます。つられている感じもあるので、共鳴動作ともいいます。

□サイクルの交換

赤ちゃんは動きます。この動きにも赤ちゃんなりのサイクルがあります。

じたばた動いて〜休憩、じたばた動いて〜休憩・・・赤ちゃんのサイクルに合わせて大人は話しかけます。これは大人同士のやりとりの基本になると言われています。大人同士でも相手が話している時は話しかけません。話し終わったかなと思うと話しかけ、自分が話し終わるとまた相手が話してきます。このやりとりがうまくいっていると、「私たち気が合っとうまく会話できているね」となります。

赤ちゃんはしゃべれませんが、

やりとりできる基礎的な力をもっています。大人が赤ちゃんやりとりがしたいと向き合っていけば、やりとりはできます。サイクルの交換を通して、赤ちゃんは、「どうも人とやりとりするのが楽しい。しかも、音声でやりとりしているんだ。」と気づき、コミュニケーションを発見します。音声でやりとりしていることを発見した後、『どうも音声には「机は机」「お水にはお水」という言葉がある。』と気づきます。赤ちゃんは、やりとりすることでコミュニケーションを発見して、最終的には言葉を発見します。それで、言葉を身に付けようとするのです。

コミュニケーションを支える大人

コミュニケーションを支えるのに、大人がいくつもやっていることがあります。その一つがIDSです。IDSは、赤ちゃんに向けられた言葉のことです。ピッチが高く、抑揚が大きい。発話が短く、区切って区切って話す。繰り返しが増える。以上のような、音声学的な特徴があります。

また、言っている中身も違います。育児語と言いますが、犬のことを「ワンワン」と言ったり、目のことを「おめめ」と言ったりするように、赤ちゃん専用の語彙(ボキャブラリー)があります。

さらに代弁もします。例えば、子どもが何かを食べた時に「おいしい」と言ったりします。また、子どもがつまずいた時に「痛くない、痛くない・・・」と言いますね。「痛くない」と言っているお母さん自身はどこも痛くないのです。転んだ子どもの問題で、親は泣いている子どもの代わりに言っているのです。よくやると思いますが、大人は子どもの考えや感情を言語化します。子どもはしゃべれないですが、大人が一人二役してしゃべることをします。これを代弁と言います。

どうして代弁しているのか

子どもとかかわっている方は、代弁によって言葉を教えているつもりは全くないと言います。

お母さんが授乳していて赤ちゃんが眠ってしまった時、「もうおなかいっぱい？」と聞きます。これは代弁ではありません。「もう一回いく？」と聞いて、おっぱいを含まそうとすると全く口に入れません。その様子をじっと眺めてお母さんが、「もういらない」と代弁するのです。ここで終われば赤ちゃんの気持ちがわかっていっていると思うのですが、面白いのが、念のためもう一度確認するのですね。「もういらない？」と確認してから授乳を終了します。つまり、お母さんは、代弁することによって赤ちゃんを知りたいと思っているらしいのです。では、どうして代弁したくなるかというと、わからないから心配で、通じ合いたいという気持ちが強いからなのです。

やりとりから コミュニケーション・言葉へ

どのようにやりとりから言葉へとうつっていくのでしょうか。

最初、子どもは指さしをします。赤ちゃんにとって認知的には大きな発達です。8か月くらいから指さしを理解するようになりますが、離れていてもさしているものがわかるというのは、自分で見えない関係をつなぐことができるということです。

次の段階は、さしている指が音声に変わります。言葉になることです。そうすると、指さしの代わりに音声に置き換えて理解できるようになるのです。

指さしと言葉には決定的な違いがあります。指さしは、目の前にあるものしかさすことができません。つまり、今この世界にあるものは共通の話題として持ち込むことができるのですが、今ここにあるものしかできません。

しかし、言葉を使うことは、頭の中でイメージすることですので、今ここではないものも話題にできるのです。言葉を使うことは、頭の中と密接に関係していることがわかります。

言葉から思考・想像へ

実は、子どもというのは、意味がわかる前からしゃべり始めます。確実に言葉を獲得してから外に向かって使うのではなく、たくさん言葉を使う中で獲得していきます。例えば「ありがとう」の言葉の意味を知る前から、「ありがとう」という状況を感じ取って使うようになり、そうしながら言葉の意味が頭の中に入ってきます。これが思考です。意外と気づいていないですが、私たちは頭の中で言葉を使っているのです。言い換えれば、頭の中は言葉でできています。どういうことかは、言葉を使わないで考えてみるとよくわかると思います。言葉を使わないで考えるのは、すごく難しいのではないのでしょうか。

私たちの思考は、もともと音声言語、話し言葉でできています。よって、話し言葉を鍛えるというのは、考える力をしっかりつくることになります。言葉というのは、今この世界を超えられます。頭の中で何でも考えることができます。しかも、主語と述語を入れ替えながら頭の中で色々なものをつくり出すことができます。それが想像です。思考と想像は、頭の中ではほぼ同じもので、現実的なものを思考、非現実的なものを想像と呼んでいます。

なぜ想像が必要か

想像は、子どもがこれから先の人生を生きていくうえで重要になってきます。

子どもの想像の世界は、すべてが想像というわけではなく、現実が反映しているものもあります。現実世界においての願望です。「でも、今の自分では現実的に無

理だから・・・」と、想像の世界で実現していくのです。したがって、子どもの想像のお話を通して、子どもが何に注意を向け、どんなことに興味があり、どのように出来事を捉えていたかということがわかります。

日本人はどちらかというと、想像力を伸ばすのが苦手です。真面目なので「嘘をついたらダメでしょう・・・」という話になることが多いからです。

実は、子どもなりに現実と区別しているようです。「嘘と想像は違う。嘘は人をだますために使うものだけど、想像というのは、人と一緒に楽しむために使うものだよ。だから大丈夫なんだよ。」と子どもに伝えてあげたいですね。

私は「赤毛のアン」が大好きです。主人公のアンは、良くない環境で育っている時に、想像の世界に逃げていきます。想像を使うことで、現実的に子どもの力では解決できない抜けだせない世界に対して、体は逃げられなくても、心だけでも逃がすということをするのですね。

想像力というのは、生きる力につながっているとされています。子どもが大変な環境に置かれた時、自分の気持ちを逃がすことが必要なのではないのでしょうか。想像力を伸ばしておくと、楽しいだけでなく、困難に立ち向かうといった意味でも、子どもの将来にいいかもしれません。

幼児期に想像力をしっかり鍛えておけば、いざという時に気持ちをどこかに逃がすことができます。想像力の大事な働きだと思います。最終的には現実と向き合う力になっていきます。想像力を育む元をたどっていくと、赤ちゃんの時に、赤ちゃんが動いているだけなのに、半分妄想で「ごきげんですね」と言ったり、目が合っているだけなのに、「私を見つめている」と思ったりしたところから始まっていたのです。

子どもが傍らにいることの素晴らしさ・大変さー乳幼児期に必要な『経験』って何だろう？

平成 29 年度開催
「乳幼児期の子育て・子育て講座」より抜粋
(講師 三谷大紀氏 H29.11.9 開催)



子育てをしていると・・・

子育てをしていると、冷静になれる時もありますね。例えば、イヤイヤ期のお子さんを抱えていると、「なんで・・・」と思わず怒鳴ってしまうこともあるかもしれません。それが普通だと思うのです。でも、少し冷静になると、「あっ、こういうことだったんだ。それなのに、思わず言ってしまった。」と、後から後悔…なんてこともあると思います。そういった時には、「さっきはごめんね。本当は〇〇したかったんですよ。」と言えればいいと思います。それで、十分間に合います。子どもの気持ちが見えた時に、言い過ぎたことがあれば、「ごめんね・・・」を言うことができれば大丈夫です。きっと、子どももホッとするのではないのでしょうか。

子どもって、スゴイ！

ある保育園の5歳児さんたちが、リレー遊びでの走る順を自分たちで決めようとしていました。しかし、二人の子が、「この順番ははずれない」とクラスを巻き込んでの話し合いになりました。そこで保育者は、「じゃあ、どうやって決めるかが決まったら教えてね」と子どもたちに委ねました。

子どもたちは一つしかない順番をどうやって決めたと思いますか。ずっと話し合った結果、「に

らめっこ」で決めることに決めたのです。「にらめっこ」の案は、揉めていた本人たちではなく、他の子どもから出たものでした。いい加減話し合いをやめなくなったのかもしれませんが。大人同士でも、ぎゅうぎゅう話し合っていると笑いがほしくなりますよね。子どもたちだってそうだったのかもしれませんが。でも、揉めてた本人たちも含め納得し、「にらめっこで決めることにしたよ」と嬉しそうに担任に報告しに行きました。「どうしてにらめっこで決めることにしたの？」と保育者が聞くと、「だってね、負けた人が笑って終われるから・・・」と返ってきたそうです。

この話を聞いた時に、この子たちが5歳までに積み重ねてきた経験がこういう発想を生み出すのに影響していると考えました。

この園では、一人一人がとても大切にされて、その子がやりたいことにとことん付き合う文化があります。その過程において、自分の思い通りになった時には、相手は、思い通りにならないといったこと、つまり他者の視点に立つことを自然と学んでいたように思うのです。自分が大事にされるからこそ、他者を大事にできる、そんなことを子どもたちが身をもって示してくれているように思うのです。

乳幼児期の子どもに必要な経験ってなんだろう？

まず大事なことは、自分の身になってくれる人と出会うことだと思います。

「いい父親、母親になりたい」と思うのは、当然のことです。ただ、なりたいけどいつもはなれないから悩みもするし、落ち込みますね。色々葛藤もするし、子どもの要求にいつもいつも応えられるわけではありません。でも、よい親になることを目指すではなく、目の前の子どもを一人の人間としてみて、あなたのことをわ

かろうとしていることを、発信していくことが大事だと考えます。「自分のことを大事にしてくれている」「自分の身になろうとしてくれている」という経験が、他者の思いや考えに関心を向けるきっかけになると感じるのです。それは、何も親だけではありません。友達かもしれないし、保育園の先生かもしれない。地域のおじさんかもしれない……。きっと、そういう人との出会いが、その子自身の育ちにとって大事だと考えます。

乳幼児期はこだわることも大事だと思います。言い換えれば、熱中し、夢中になり、自分なりに試行錯誤したりすることです。そのことを、他者と一緒に喜んだり、楽しんだり、悩んだりする経験を通して子どもは育っていく考えます。

「遊び込む」ことで育つ

ある保育園での話です。0歳児の子が、床に親指をたてて何か感触を楽しんでいるようでした。よく見ていたら、床だけでなく、ラグマットとか、おもちゃなどさまざまなものをたたき、それぞれの音の違いを楽しんでいるようにみえ、担任の先生は、「この子は音を楽しんでいるのかもしれない。」と考えました。Y君が音に興味があると考えた担任の先生は、保育室の環境を見直し、音の出る素材や遊具を準備しました。その一つが太鼓でした。Y君は、太鼓が他のモノとは違う音がすることを楽しみ、ばちを保育者から手渡されると、早速ばちで太鼓をたたき始め、「指とは違うよ・・・」という感じで保育者の顔を見ました。他の子が、ばちを投げたり、なめたりするのに対して、彼は一切そうしたことをせずに、いろいろなところを叩いて、「違うよ」みたいな表情を見せたことから、先生は「音を意識して面白がり、そのことを私と共有しようとしているのかもしれない

な・・・」と思い、一緒に音の違いを楽しんだそうです。

大事なことは 「応答的」であること

注目したいことは、その子が何を考えているのか、何ができているのか、先生がわかっているということではなく、子どものしていることに対して応答的であるということです。子どもは0歳であっても5歳であっても、何かしら発見し、発信しています。その内容を正確に理解しているか、していないかが問題なのではなく、子どもが発信していることに対して、私たち自身が「あっ、そうなのね。面白いね。すごいね。」というふうに、スルーしないで返すことが大事だと思うのです。

担任の先生は、『「こんな音見つけたよ」ということを自分の好きな人に共感してほしい、一緒に味わいたいという思いが芽生え、そのことを楽しみ始めている。』と言っていました。

遊びのなかでの育ちは、見えにくいものです。見えにくいからこそ、保育者は、保護者に対して、「今日、こんなことをやりました・・・」だけではなく、その子が面白がっていること、興味・関心をもっていること、その子が悩んでいることなどを発信していくことが必要になります。実際Y君の保護者も、園から発信によって、家での遊具を見直したり、Y君の姿を楽しんでいきます。園で見つけたその子の好きなことを家庭と共有し、その子を取り巻く大人たちがそのことを喜び、楽しんでいく。そんな子ども向けられる温かいまなざしや関係が、その子の育ちを育んでいくのです。

なにもお母さん、お父さんはお子さんの好きなことを家庭だけで見つける必要はないのです。実は、わが子だからこそ見えにくくなっていることもあるのです。「これ困るのよね・・・」という

ことが、他の人から見ると、とっても素敵なことに見えるかもしれないのです。

子どもの思いと大人の願いの狭間

とはいっても、子どもの姿と私たちがもつ願いの間で、結構ギャップやズレが生まれると思います。「もっと思いっきり遊んでほしい」と願っていても、全然遊ぼうとしないこともあるでしょう。

私が先輩研究者に相談したときに、「子どもは7割から8割やりたいと思えばやる。やらない時は、まだそのリミットまでできていないのだから、それをちゃんと認めなさい。」と言われたのを思い出します。

大丈夫を決めるのは子ども。やる、やらないを決めるのも子ども。興味のスイッチが入った時には急にやり出すこともあるのです。私たち大人が色々な願いを持ち、葛藤している時、きっと子どものほうも、葛藤しているのだと思います。

また、「遊び」というと、どうしても大人の側は、名前のある遊びをイメージします。しかし、子どもの側から見ると、床をトントンしているだけでも遊び込んでいる場合があるのです。私たち大人が、「遊び込むこと」「子どもの好きなこと」、そしてそこで、楽しんだり、葛藤していることを、子どもの側から考えることが必要なのです。

「する」か「しない」かを含め、自分のことを自分で決める経験が、その子の世界を広げると思っています。

ただ、子どもの遊びを見ていると、「危ない!」ということもやるので、ヒヤヒヤします。イライラすることも多かったり、ついつい他の子と比べてしまったりすることもあるかもしれません。

子どもの要求に応えられないことだってあるわけです。その時には、「それは無理だよ」と、説明したらいいのです。親だって人

間です。育児書や私が言ったから無理するのは禁物です。応答的にやっていくしかないです。ただし、「本当は、ぼく・わたしだってやりたいんだよ」といったように自分の気持ちを思いっきり出せる場面も、つくってあげたいですね。

子どもとともにある 大人のあり方

子育てにおいて、我が家の場合、我が家だけで考えたわけではありません。保育園時代の親仲間、園の先生とか先輩研究者とか、色々な人に話を聴いてもらっています。親にとって、自分自身ができていないことを安心して話せる関係が大事だと思います。子育てを孤育てにしない。今の時代、自分たちだけで育てるのは大変です。大人が、私は私なりに頑張っているというように認めてもらえる関係をつくりたいですね。何も大勢の子育て仲間を作る必要はないです。自分の本音を話せる相手がいれば大丈夫です。

子どもだってそうですよね。「苦しんでいる、大変だ・・・」ということ、一緒に「大変だよね」と言ってくれる人がいることで安心感をもつと思います。

子どもが生き生きしていくためには、私たち自身が生き生きしていることが大事だと思います。それは、「私たちが肯定的に認められる関係や場をつくる」ということです。

また、私たちの横顔と後ろ姿も大事だと思います。私たち親が、いろいろあるし大変だけれども、「まあ、なんとかなるか・・・」という雰囲気醸し出し、日々の生活を楽しんでいることが、実は結構大事だと思うのです。

子どもと大人の間で、あるいは、大人同士、地域の人、園や学校の先生、こういった役所の方々との間で、「おもしろいね」「よかったね」「不思議だね」「すごいね」「大丈夫?」、間違った時には「ごめんね」、助かった時には「あり

がとう」といったそういう言葉が
応答的に交わされる時は、少～し
子育ての負担が、大変さが和らぐ
んじゃないかなと思います。
子どもの傍らに、楽しそう、幸

せそうな人たちの関係や雰囲気
が身近にあることが大事なので
す。子どものために何ができるか
と思った時に、子どもの傍らにい
る大人自身が幸せそうであるこ

と、楽しそうにしていられること
が、むしろ大事なんじゃないかな
ということを最近感じています。
【研究研修担当】

茅ヶ崎市小学校中学校 創意工夫・研究作品展のお知らせ

New!! 平成30年度 第47回 作品展のご案内

平成30年度は、第47回を迎え
ます。小・中学校の先生方が中心
となって運営し、各学校をととし
て作品を募集します。茅ヶ崎市在
住、在学であれば、私立の小・中
学校に通う児童・生徒の作品も受
け付けています。

作品展の開催日時・会場

- 9月14日(金)・15日(土)・
16日(日)の3日間
いずれも9時から17時まで
- 茅ヶ崎市青少年会館
(十間坂三丁目5番37号; 梅田中学校前)

2 つ の 部 門

作品展には2部門あります。

□ 創意工夫作品部門

普段の遊びや生活の中から、こ
んなものがあつたらいいなあ
と思うことを工夫して作り出した
もの。

□ 研究作品部門

理科学的な内容や社会的な内
容など、観察や実験、調査したも
のをまとめたもの。

作 品 応 募 の 手 順

- ① 夏季休業を利用して創意工
夫作品を製作、または自由に
課題を選び研究します。
- ② 作品は各学校の担任の先生
に出品します。茅ヶ崎市在住、
在学で私立の小・中学校に通
う児童・生徒の皆さんは、直
接教育センターに出品します。
- ③ 各学校と教育センターで事

前選考があり、事前選考で選
ばれた作品が、作品展に出品
されます。

詳しくは、7月上旬に市ホーム
ページで紹介します。

平成29年度 第46回 作品展の様子

平成29年度の第46回作品展
にも素敵な作品が集いました。

「情熱・疑問・好奇心！生み出 そうころのそうどうタマゴ 想像と創造のころ」

第46回作品展テーマは、“情
熱・疑問・好奇心！生み出そう
ころのそうどうタマゴ 想像と
創造のころ”。

出品作品数は、各学校から選
ばれた創意工夫作品部門244作品、
研究作品部門296作品、合計540
作品でした。作品展審査会で、
金・銀・銅・努力賞を選考し、展
示しました。

作品展は、平成29年9月8日
(金)から10日(日)の3日間、
市青少年会館で開催されました。
3日間でご来場された方々は合
計3,177名ととても多くの方々
にお越しいただきました。

展示されたお子さんの作品を
家族で見に来られた方々、友だち
の作品を見に来た子どもたち、来
年の参考にと見に来られた保護
者の方々などで、会場は大変にぎ
わいました。お孫さんの作品を見
に来られた祖父母の方々が、お孫
さんの頑張りにほほえんでいら
っしゃるお姿が印象的でした。



<平成29年度作品展の様子>

創意工夫作品部門優秀作品が 「第76回神奈川県青少年創意 くふう展覧会」へ

創意工夫作品部門優秀27作品が、
第76回神奈川県青少年創意くふ
う展覧会(主催:神奈川県/一般
社団法人神奈川県発明協会)に出
品され、結果は次の通りでした。
今年度は、特別賞に1作品、優
良賞に5作品が選ばれ、例年以上
の好成績を収めました。

【神奈川県発明協会会長賞】

「ウォーターガイド」
汐見台小学校 5年 羽賀穂音さん



【優良賞】

「逆さまでキレイな歯ブラシ置き」
松浪小学校 2年 渡邊 哲史さん



【優良賞】

「おかあさんのマッサージくん」
梅田小学校 3年 松本 直樹さん



【優良賞】

「座ったら電気つくマシーン」
浜須賀小学校 4年
野 純青さん



【優良賞】

「ハンディークリーナー」
鶴嶺小学校 6年
小林 優仁さん



【優良賞】

「高齢者用
つり革アタッチメント」
第一中学校 1年 中島 知睦さん



【努力賞】 21 作品（21 名）

創意工夫作品部門優秀作品が
「第 76 回全日本学生児童発明
くふう展」へ

第 76 回神奈川県青少年創意くふう
展覧会で特別賞を受賞した 1 作品
は、第 76 回全日本学生児童発明く
ふう展（主催：公益社団法人発明協
会）に出品されました。

研究作品部門優秀作品が
「第 35 回全国小・中学生作品
コンクール」へ

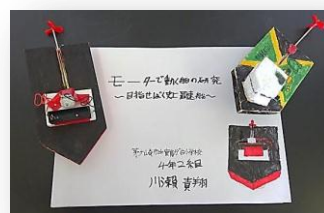
【理科部門：全国中学校理科教育
研究会会長賞】

「靴下に隠された泡の原因とは
～父の靴下を汚した犯人を捜せ～
第一中学校 3年
松坂 美花さん



【理科部門：優秀賞】

「モーターで動く船の研究～目
指せ ぼく史上最速船～」
鶴が台小学校 4年
川瀬 貴翔さん



【生活科部門：優秀賞】

「オレの 神ひこうき～もっと
長く、もっととおくへ～」
梅田小学校 2年
高木 夏輝さん



【生活科部門：優秀賞】

「しょくぶつはどんなあじがす
き？」
鶴嶺小学校 1年
國司 依吹さん



【社会科部門：

センバス・グループ賞】

「危機から救え！ごみ問題」
今宿小学校 4年

沼 紡さん
工藤 巧さん
宮川 智嗣さん



【研究研修担当】

一人で悩まないで 相談してみよう

青少年教育相談室から

生活する中で、友だちとの関係に悩んだり、自分に対して否定的な感情を抱いたりすることは、誰にでもあることです。でも、その時はとても苦しく、自分を見失いそうになることもあります。

決して一人で悩まないでください。本センターの青少年教育相談室では、お子さん自身の悩み、保護者の方々の悩みに寄り添い、お力になりたいと思います。

各種相談を電話・面接（来所）で行っています。相談の秘密は守ります。お気軽にご相談ください。

面接は各相談電話で予約してください。

電話相談・面接予約

- 月曜日から金曜日
（休日及び年末・年始を除く）
- 昼間：9時から17時
各電話で受け付けます。
- 夕方：17時から18時
電話：0467-86-9963 で受け付けます。

相談スタッフ

青少年教育相談員
（臨床心理士・教職経験者等）

相談の方法と内容

1 電話相談

【一般教育相談・青少年相談】

電話：0467-86-9963・9964
勉強や進路のこと、親子関係、非行や将来への不安などの悩み。

【「こころ」の電話相談】

電話：0467-57-1230
学校に行きたくても、行くことができない。すぐにいらいらしたり、落ち込んだりする。お子さんの不登校などにどう対処したらよいかという悩み。

【「いじめ」電話相談】

電話：0467-82-7868

「いじめ」の場面を見たり聞いたりした。「いじめ」への対処をどのようにしたらよいかなどの悩み。

【特別支援電話相談】

電話 0467-86-1062

お子さんに友だちができない、落ち着きがない、学習のつまずきがあるなどの悩み。

2 面接相談

電話 0467-86-9963・9964

（予約制）

いじめ・不登校など、電話では相談しきれない内容やじっくり時間をかけて相談したい内容について、専門の心理相談員が、問題解決に向けて一緒に考えます。継続的な相談に応じています。電話で予約をしてください。

3 小・中学校要請教育相談

「2 面接相談」を受けている小・中学生を対象として、保護者の要請により、専門の心理相談員が学校を訪問します。子どもの様子を把握し、学校の先生も交えて相談を行います。

不登校児童・生徒訪問相談

不登校あるいは不登校傾向にあり、なかなか外に出ることが難しい小・中学生のご家庭に、気軽に話せる相談員が訪問し、相談を行います。相談活動を行うことで、登校への不安を和らげ、子どもの生活状況の改善を目指し支援をしています。

あすなろ教室入室のご案内

学校に行きたくても行かれない小・中学生の皆さんが、心を休め、自分らしさを大切にしながら活動する場所です。お子さんが学校に戻って楽しい学校生活が送れるようにお手伝いします。

通室生は、自分らしさを大切に

してゆっくりと自分の生活を作り上げながら、集団生活に対する自信を深めることを目指して活動しています。

一人ひとりが課題を決めて自分のペースで学習を進めるだけでなく、集団でのゲームや体験学習といった興味ある楽しい活動を通して視野を広げ、人間関係を作り上げる力を養っていきます。



<あすなろ教室の活動の1コマ>

各小・中学校の 心の教育相談室

名称は様々ですが、各小・中学校に子どもたちが自由に利用できるホッとできる空間（部屋）があります。そこに、心の教育相談員がいて子どもたちの話し相手や、ちょっとした相談を受けています。子どもたちの悩みやストレスを早期に発見・対応し、安心できる過ごしやすい学校生活を提供できるように努めています。

また、月に数回、スクールカウンセラーという心理の専門家が勤務します。子育てや教育に関する相談を受けています。相談希望のある保護者の方は、学校にご相談ください。

【青少年教育相談担当】

編集担当／茅ヶ崎市教育センター
☎ 研究研修担当（市青少年会館3階）
☎ 0467-86-9965
☎ 青少年教育相談担当（同館2階）
☎ 0467-86-9963
茅ヶ崎市十間坂三丁目5番37号
URL <http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kyouiku/1005049/index.html>